

2015.12.11

橘 永久

論文（卒論も読んで字のごとく論文）には独創性が求められます。その論文が掲げる目的（**The purpose of this paper ...**）の部分に関しては、その論文でないと知ることができない、という点が大事です（＝読んでもらえる企画書）。人と同じでは駄目なのです。この独創性を求められる点が、文系の学生にとって卒論に取り組むことがとても大切であることの最大要因です。大学での勉強と言っても、その方法は小学校1、2年時のものと同じです。「人が教えてくれることを効率よく吸収する」です。卒論になって初めて、「自分で問を立てる＝独創性を追求する」という作業に取り組むことになります。私は、「自分で問を立てられるようになる」（少なくとも一回はそういう経験をする）ことが、大学生活の最大の目標であると考えています。

問の立て方ですが、通常は、

a) A puzzle to be tackled

b) An important remaining question

の明示で行います。「適切な問＝重要かつ検証可能な問」の明示ができれば、論文作成の6割以上を終えたも同然です。逆に言えば、「問いを立てる」ことが卒論作成の最大の難所です。あまり良い例ではないかもしれませんが、最近の自身の研究から a), b) の例を示しておきます。ただし引用文献の部分は、でまかせです。

a)

「西アフリカ諸国では、都市化に伴いコメの消費が大幅に増えている(Tomchi 1998, Tachibana 2005)。しかし、こうした西アフリカ諸国の多くでは、なかなかコメ農家が増えていない。コメの生産に最適な未利用低湿地がかなり残っているにもかかわらず、である(WARDA 2013, Ch.3)。なぜだろうか？この問題は、コメ輸入がただでさえ苦しい外貨需給をさらに圧迫している西アフリカ諸国の経済発展問題にとって重要な論点である。そこで本論文は...」

b)

「殆どの途上国で、親が出稼ぎに出ている家の子ほど、平均すれば学校での成績が落ちることは明らかになっている (e.g., Anderson 2002, Tachibana 2011, Watanabe and Saito 2014)。しかしながら、この成績を下げる要因・経路は明らかになっていない。そこで本論文は…」

最後に書き方について一言述べておきます。論文というのは、「自分がどう考えるか」を記述するだけでは駄目で、「なぜそう考えられるのか」を、他の人が納得できるように、論拠を示しつつ書かなくてはなりません。論拠は、上記 a) b)の例のように、既存文献や統計の提示により行います。